様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２２９１

研究課題名（和文）戦後日本の詩的言語における〈近代〉批評の実践に関する文化史的・思想史的研究

研究課題名（英文）Critique of "Modernity" in Postwar Japanese Poetry: On the Cultural and Intellectual Context

研究代表者
田口　麻奈（TAGUCHI, Mana）

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：８０７４８７０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、主として、
①研究成果を盛り込んだ著書を上梓し、鮎川信夫の代表詩篇を〈近代〉批評という思想史的な文脈の中に位置づけた。②鮎川の戦中の疎開先である岐阜県郡上市と戦中詩篇の生成の関係性について考究した。③1950年代の科学技術をめぐる議論と当時の詩壇の詩意識の関係に光を当てる論考を発表した。④戦後の大学生による詩サークルの活動を検証し、「荒地」以後の若い世代の詩意識や外国文学受容を考証した。⑤国際学会（EAJS）において、戦後詩における総力戦の表象とその意義を発表した。
以上により、戦後の詩営為の基盤に〈近代〉への批判や応答の契機があることを、具体的な資料に基づいて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果のなかには、これまで所在不明であった戦前の詩誌や詩人達の書簡、原稿などの紹介が多く含まれており（特に上記【研究成果の概要】①、④）、基礎研究の拡充という点で確実に歩を進めている。また、そうした資料的裏付けを得た上で、個々の詩営為を文化史的、思想史的な文脈のなかに位置づけていることから（上記①、②、③、⑤）、個別の詩人研究にとどまらない視野を開いている。
研究の社会還元に関しては、現代詩の実作・批評を牽引する出版社から著作を上梓し、学界に限らない幅広い読者に向けて成果を発信しているほか、個々の詩人のゆかりの土地で講演をおこない（上記②）、地域文化と学術研究の対話の場を創出している。

研究成果の概要（英文）：In this study,
(1) I published a book incorporating the results of my research and positioned the representative psalms of Nobuo Ayukawa as psalms that critique "modernity" in terms of the history of ideas.(2) The relationship between Gujo City, where Ayukawa was evacuated to during the war, and the generation of poems during the war was examined. (3) The article sheds light on the relationship between the debate on science and technology in the 1950s and the poetic consciousness of the poetic world of the time. (4) Examined the activities of poetry circles of university students in the post-war period, and examined the poetic consciousness of the younger generation after 'Arechi'. (5) At the International Conference (EAJS), I presented the representation of total war in post-war poetry and its significance.
Based on the above, I have clarified, on the basis of concrete data, that the foundation of post-war poetry was the opportunity to criticise and respond to 'modernity'.

研究分野：日本近・現代詩、戦後詩

キーワード：鮎川信夫　T.S.エリオット　詩劇　IOM同盟　反戦平和運動　〈東大詩人サークル〉　「荒地」受容　一九五〇年代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

国内における戦後詩への研究的関心は、近年、1950 年代の左翼文化活動を担ったサークル詩運動に集中してきた。詩を媒介とした草の根の政治活動、表現活動の歴史を掘り起こした点でサークル詩研究の功績は大きい。だが一方で、サークル詩人たちの〈社会派〉としてのあり方を評価する視点は、彼らの社会性の質に疑問を呈していた『荒地』グループやその影響を受けた詩人たちの方の〈社会派〉的側面を見落としがちであり、戦後詩全体に通底する、詩的言語と社会との通路を開く試みの実態および全体像はいまだ曖昧であった。

その点、2016 年から刊行の始まった『コレクション・戦後詩誌』（ゆまに書房、和田博文氏監修）などの復刻雑誌の刊行は、より俯瞰的な立場から戦後詩全体の資料整備を図るものであり、こうした動向により研究上の利便性は大きく向上しつつある。だが、戦後詩研究はもともと研究者の層が圧倒的に薄く、それぞれの方法論が交わらないまま局所的な成果が積み重ねられてきたために、資料面の拡充がただちに議論の活性化には繋がりにくいことは否めない。たとえば、戦後の詩作品と現代社会とを戦略的な読みによって直接繋ごうとする文芸批評的な試みには、新たな資料研究の成果が反映される余地がもともと少ない。他方、資料研究を旨とする側にも、個別の詩に対する多角的な読解の試みは蓄積されていない状況にある。

このような状況をふまえ、申請者はこれまで、「詩的言語から見た戦後日本の共同体意識の研究――「荒地」派を中心に――」（日本学術振興会特別研究員 PD、24・8416）や、それを発展的に引き継いだ「戦後日本における詩的言語の公共性に関する総合的研究」（研究活動スタート支援、16H07112）の遂行を通して、戦後詩の理念的な牽引者であった鮎川信夫や「荒地」グループの詩の読解・分析と並行して、全国に点在する同人誌などの調査蒐集を進め、鮎川の詩営為と時代的な課題とのを有機的な繋がりを確認してきた。その結果、鮎川の代表詩篇の多くが具体的な詩的状況への批評性を有していることを明らかにし、詩という表現形式を有効に用いた特異な思想家としての役割を証すことができた。加えて、1950 年代に全国的に高潮したサークル詩運動（左翼文化活動）に対し批判的な位置を取り続けた鮎川や「荒地」が、詩の社会性・公共性という課題に関しては同時代の理念を共有していたことを重視し、広く公共哲学の問いを共有する観点から戦後詩の可能性を考究してきた。本研究は、上述の蓄積を基盤として、戦後詩の基礎研究をより拡充し、個別の詩篇の読解や意味付けと、歴史的文脈の検証とを並行して進めようとするものである。

２．研究の目的

（１）戦後の文学状況における詩人たちの活発な批評・言論活動の実態を、鮎川信夫および「荒地」グループを中心に資料面から考証すること。これによって、戦後詩を、戦争体験にまつわる個人的感情の表出ではなく、独自の歴史意識・国家意識を示した先進的な戦後思想の一環として位置づけること。

（２）「荒地」グループを起点とした日本戦後詩の帰趨を思想史的・文化史的に把握すること。これによって、詩的言語の可能性を原理的に探求するとともに、詩と社会との積極的な関係性を見失って行ったその後の現代文学を批判的に捉え直すための視座を提出すること。

（３）上記２点を総合して、戦後詩という研究領域を哲学や歴史学など他の諸領域にとっても重要な参照先として開拓し、戦後文学ないし戦後思想の全体像を刷新すること。

３．研究の方法

本研究は、同時代文献の踏査を通じて個々の詩句の持つ歴史性を検証し、詩篇を具体的な文学状況の中に位置付けるという実証性を重視している。多くの新資料を得た上での詩作品の時代的意義の闡明は、文化史研究全般に益するところも大きく、〈詩的言語〉の考察が手薄であった戦後文学・戦後思想研究を多層化することにも繋がる。本研究期間内での具体的な作業設定は以下のとおりである。

（１）鮎川および「荒地」におけるＴ・Ｓ・エリオット受容をはじめ、これまでも断片的に指摘されてきた西洋文学からの影響を本格的に検証するとともに、そうした一方向的な受容や摂取にとどまらない、同時代の世界的課題への批評・応答といった対話的関係を見出すことを目指す。たとえば戦後思想の潮流を形づくった Ｊ・Ｐ・サルトルなどフランスの実存主義思想を、「荒地」の詩人がどのように受け止め、詩作の上での批評性を打ち出しているかを、資料的な裏付けとともに読み取る。これによって、当時の世界文学との思想面での本質的な共振があったことを検証する。

（２）戦後詩をめぐる国内状況の検証の一環として、戦後の東京大学で発刊されていた〈東大詩人サークル〉および〈明日の会〉の機関誌の誌面を検討する。この詩誌には花崎皋平（はなさき・こうへい）や小海永二（こかい・えいじ）、小田島雄志（おだしま・ゆうし）など、後に公共哲学や仏文学、英文学などの各領域で活躍する同人が多く参加しており、当時の若い世代における海外文学摂取の先端的状況を示すほか、年長の「荒地」グループを意識した世代的な自覚や、アカデミズムと学生運動の均衡をはかろうとする独自のバランス感覚が見られる。この詩誌の検証を通して、知識人としての詩人の位置という、「荒地」やその後の 1960 年代詩にも連なる課題を具体的に明らかにする。

（３）複数の海外の研究者と連携することで、複層的な文脈から、日本戦後詩の持ち得た世界性を検証する。申請者のこれまでの活動から、各国の若手研究者と連携の準備が出来ており、最終年度には、日本学の国際学会（European Association for Japanese Studies）においてパネル発表の申請を行う。申請者はそのなかで、鮎川の詩篇「アメリカ」（1947）を中心に取り上げ、近代国家と詩的主体の関係性をめぐる洞察を詩的手法に則して考察する。また、当時 L・アラゴンや P・エリュアールなどフランス文学者とその戦時中の抵抗活動を賞賛していた日本の詩壇に対する鮎川の懐疑を見出すとともに、鮎川や「荒地」の詩における〈抵抗〉や〈責任〉の概念に対する批評性を明らかにする。

４．研究成果

（１）本研究課題の成果を盛り込んだ『〈空白〉の根底――鮎川信夫と日本戦後詩』（思潮社、2019 年 2 月）を上梓した。書き下ろしの章である「橋上の人」論は、本研究の柱である〈近代〉批評の文脈において鮎川信夫の代表詩篇「橋上の人」（1943～1951）を問い直す試みであり、当時流行した T・S・エリオットの詩劇論や詩の公共性をめぐる議論のなかに同作を位置づける新たな視野を示した。また同書には、新発見資料である鮎川信夫書簡や戦前の詩誌『LUNA』の翻刻や解題を収録したほか、トマス・ウルフの小説「天使よ故郷を見よ」（1929）と、その翻案である川上春雄「長詩・アメリカ」（1954）を鮎川の詩の重要な参照先として指摘し、典拠研究の歩も進めることが出来た。

（２）（１）の著作の刊行をきっかけに、研究の現状と課題を周知する機会を多く得た。まず、同世代の戦後文学研究者とともに公開書評会を開催し（2019 年 10 月 19 日、於・東京大学駒場キャンパス）、現行のポストコロニアリズムやポストヒューマニズムの議論と拙著との差異や交点を検証した。さらに、その際の議論の内容を座談会として公開することで、戦後詩研究の現状を広く共有することが出来た（座談会「〈近代〉に繋留する――戦後詩に〈正面〉 から向き合うこと」『現代詩手帖』2020 年 11 月）。

（３）鮎川が一時期疎開していた地でもある岐阜県郡上市にて招待講演をおこない、詩篇「橋上の人」（戦中版）の意義について考察した（2019 年 11 月 16 日、於・郡上市総合文化センター）。終戦直後の一時期、鮎川は同地においてこの「橋上の人」（戦中版）の改稿作業に腐心しており、それと並行して多くの詩友と書簡を交わしている。講演では、こうした環境と詩篇の生成との関係性について未発表の研究成果を提示した。また、同企画の一環として、同地在住の詩人や教育関係者各位とともにシンポジウムを開催し、今後の鮎川信夫受容について、幅広い読者層を視野に入れた議論をおこなうことが出来た。

（４）戦後詩をめぐる基礎研究の一環として、兵庫県姫路市で開催された詩歌原稿展についての論考「IOM 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証」（『都留文科大学大学院紀要』第 24 集、2020 年 3 月）を発表した。本稿は在日朝鮮人文学を専門とする逆井聡人氏（東京外国語大学講師、当時）との共著であり、1950 年代の詩人・言論人の手になる多数の第一次資料を整理・紹介するものである。これらの新資料群は、公益財団法人・日本近代文学館に寄贈済であり、散逸の著しい 1950 年代の詩誌の蒐集保全に寄与することが出来た。

（５）1950 年代の有力詩誌の一つである『現代詩』復刻の刊行に携わり、解題として、50 年代の核技術をめぐる詩壇内外の議論を考察した「「死の灰詩集」論争と戦後詩における〈近代〉批判の布置」を執筆した（『現代詩』復刻版、三人社、2020 年 5 月）。「死の灰詩集」論争を、単純に詩壇内の角逐としてではなく、その後のソ連による人工衛星打ち上げ時の詩人たちの反応を含めた進歩史観を軸に読み直すものである。50 年代の核技術および科学技術をめぐる議論は当時の世界的課題であるとともに、現在も多方面から関心を集める領域であり、総合的な視野での戦後詩研究に向けて歩を進めた。

（６）戦後、新制東京大学で結成された〈東大詩人サークル〉およびそれを母体とする〈明日の

会〉の機関誌「ぼくたちの未来のために」について、当該誌の前身また前々身にあたる同人誌を新たに確認することが出来たほか、「荒地」グループとの交流を跡付ける私信の類も発見・入手することが出来た。これらは当該雑誌の周辺の人脈や対外的な活動の詳細を明らかにすることのできる貴重な資料である。これらの資料の公共化に関しては、本研究期間外の予定とはなるが、出版社と協働して復刻を目指す。

（７）ヨーロッパにおける日本学の国際学会（第 16 回 EAJS）において、戦後詩における総力戦の表象とその意義を、「荒地」グループを中心に考察する個人発表をおこなった（Poetics After the Total War: Ayukawa Nobuo and Arechi Group, 2021 年 8 月 27 日、オンライン開催）。本研究課題の当初の予定としては、複数の研究者とのパネル発表の予定であったが、参加予定者の環境の変化等により調整が難しく、申請者個人の単独発表に切り替えるなどの変更が生じた。また、covid-19 の影響により、当該の国際学会自体が延期となった関係で、本研究も一年間の延長を余儀なくされた。しかしながら、延長となった期間内に新たに付け加えた展望も含めた形での成果発信に繋がった。この成果は、延長期間内に新たに申請した研究課題「戦後日本の詩的言語における文明批評性に関する包括的研究」（若手研究、21K12927）に接続し、発展させてゆく予定である。

（８）（１）～（７）以外の成果として、詩の解釈におけるアイロニーに注目した小文「日本語から日本語へ」（『文芸研究』2021 年 3 月）や、近現代詩に関する評論集の書評（岡本勝人『詩的水平線』響文社、坪井秀人『二〇世紀日本 語詩を思い出す』思潮社）を執筆し、詩をめぐる批評・研究の現在の課題について省察と問題提起をおこなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 瀬尾育生，田口麻奈，樋口良澄	４．巻 64(8)
２．論文標題 鼎談「戦後詩研究の射程」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 「現代詩手帖」	６．最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田口麻奈	４．巻 64(8)
２．論文標題 「荒地へ帰る、歴史へ帰る――鮎川信夫宛二村良次郎書簡」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 「現代詩手帖」	６．最初と最後の頁 36-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田口麻奈	４．巻 83
２．論文標題 書評 坪井秀人著『二〇世紀日本語詩を思い出す』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 「昭和文学研究」	６．最初と最後の頁 240-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田口麻奈 ， 藤井貞和 ， 野沢啓 ， 野村喜和夫 ， 坪井秀人 ， 宮崎真素美	４．巻 64(9)
２．論文標題 応答：「荒地」から考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 「現代詩手帖」	６．最初と最後の頁 104-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口麻奈	4．巻 47
2．論文標題 「「共通感覚」の希求（書評●岡本勝人『詩的水平線--萩原朔太郎から小林秀雄と西脇順三郎』 」）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 季刊「びーぐる　詩の海へ」	6．最初と最後の頁 100-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井貞和，田口麻奈，逆井聡人，木村朗子，村上克尚	4．巻 63（11）
2．論文標題 「近代に〈繋留〉する――戦後詩に〈正面〉から向き合うこと」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 「現代詩手帖」	6．最初と最後の頁 56-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口麻奈	4．巻 144
2．論文標題 「日本語から日本語へーー伊東静雄「夏の終」をめぐって」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 「文芸研究」	6．最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口麻奈・逆井聡人	4．巻 24
2．論文標題 「IOM同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『都留文科大学大学院紀要』	6．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Mana Taguchi
２．発表標題 Poetics After the Total War: Ayukawa Nobuo and Arechi group
３．学会等名 International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 澤正宏・加藤邦彦・田口麻奈・鳥羽耕史	４．発行年 2020年
２．出版社 三人社	５．総ページ数 306
３．書名 『現代詩』復刻版別冊（解題・総目次・執筆者索引）	

１．著者名 田口麻奈	４．発行年 2019年
２．出版社 思潮社	５．総ページ数 554
３．書名 「〈空白〉の根底――鮎川信夫と日本戦後詩」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

明治大学　教員データベース https://gyoseki1.mind.meiji.ac.jp/mjuhp/KgApp?kyoinId=ymbygegmggy 教員業績照会 https://ptweb.tsuru.ac.jp/step/KInfo.asp?ID=186

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関